

# 土木學會 中支派遣 三代表の講演會

土木學會に於ては時局對策委員會を設けて支那事變に對する諸種の對策を研究しつゝあるが、先づ中支那の戰跡視察と現地慰問を行ふ事となり、井上秀二、青山士、橋本敬之の三氏が代表として6月11日東京を出發して、上海南京、杭州等の諸種の土木施設を巡視し、軍當局及び現地に活躍せる多數の土木技術家を慰問し、又將來の對策等に就て調査資料を蒐集して歸られたので、土木學會に於ては七月十二日午後五時より東京市有樂町の蠶糸會館講堂に於て右の報告講演と映畫の會を開催し盛會を極めた。

先づ辰馬會長より開會の挨拶を述べられ、

井上秀二氏は上海市の各水道の施設狀況を述べられ、大上海將來の都市計畫事業と俱に水道設備の一大改良に關する意見を發表し、現在の水源が黃浦江の汚水甚だしきを改めて揚子江本流より取水するの必要を述べ、

青山士氏は上海港及び揚子江流域の港灣設

安 倍	邦 衛	阿 部	美 樹 志
荒 池	忠 吉	井 上	秀 二 郎
池 上	重 吉	岩 井	宇 一 郎
内 海	清 溫	遠 藤	藤 吉
大 竹	邦 平	岡 崎	保 吉
加 藤	新 松	片 桐	嘉 靖 郎
榧 木	寛 之	川 川	國 三 郎
菅 野	忠 五 郎	北 譚	惇 夫 郎
黑 河	内 四 郎	小 柴	健 太 郎
佐 藤	利 恭	坂 本	丹 治 郎
瀧 谷	彦 吉	下 村	尚 式 郎
竹 肥	一 郎	武 田	侃 太 郎
丹 治	經 三	外 山	繁 治 郎
中 村	光 四 郎	永 井	松 太 郎
丹 羽	鋤 彦	西 尾	鉢 太 郎
橋 本	敬 之	林 田	光 七 郎
平 山	復 二 郎	藤 田	弘 直 郎
松 永	工	三 浦	義 男 愛
山 田	隆 二	山 田	博 博

備及び河川の狀況に就て調査の結果を述べ、將來の大上海が中支那に於ける發展根據地としての使命を有するものとなし、上海港擴張及都市計劃の必要を述べ、

橋本敬之氏は上海、南京、杭州等の鐵道施設及交通に就て述べ、此地方が日本内地の面積と匹敵し、人口の平均密度は日本以上であるが、鐵道停車場其他保安設備等も簡単で、鐵道交通の利用率が少く、收入に比し、經費が過大なる點を數字的に述べ、此の原因はクリークが發達して舟運に依るもの多く、市街と停車場との連絡不備等諸種の理由を述べ、

最後に三代表が視察中の16ミリ映畫を發表して、戰蹟の慘憺たる狀況及び揚子江、黃浦江、其他南京等の港渡、水道、鐵道等の實況を知る事が出來た。

尙ほ別室食堂に於て有志の晚餐會を催され盛會を極めて歡談裡に散會したのは八時頃であつた。參會者は次の諸氏であつた。

青 山	士	新 井	榮	吉 治
井 上	根	伊 藤	孝 有	芳 雄
岩 崎	富 久	上 野	前 田	廣 義 文
小 野	基 樹	大 井	上 野	三 茂 吉
岡 野	昇 樹	荻 島	正 一 郎	興 郎
金 子	源 一 郎	原 重	太 作	好 松 一 郎
河 野	繁 一 郎	河 原	藏 后	山 光 治
楠 五 倍	宗 太 郎	藏 田	真 瀧	聽 三 光
島 島	慶 太 郎	后 田	谷 口	治 邦 郎
原 五 倍	勇 太 郎	真 田	波 那	好 松 一 郎
太 刀 川	平 治	瀧 伸	田 那	喜 貫 次 郎
辰 馬 達	太 作	谷 仲	波 伸	次 郎
遠 武 達	藏 熊 那	松 伸	田 伸	忠 忠 次 郎
永 田 兵 三	勇 那	井 喜	川 貫	茂 庭 次 郎
西 大 條	藏 那	平 喜	山 忠	
原 靜 雄	勇 伸	前 貫		
眞 島 健 三	那 伸	茂 忠		
名 井 九 介	那 伸	庭 次 郎		
山 本 新 次	那 伸			